南極委員会だより

昭和基地の越冬生活

福　谷　　博*

昭和基地開設当時の越冬隊員の生活については，西堀栄三郎著（1958）“南極越冬記”（岩波新書）に詳しい．また最近の生活状態については，医師の立場で，蜂須賀弘久（1971）が「越冬生活の集団心理」（“極地”，Vol. 6, No. 2）を記している．その他断片的にではあるが“南極資料”，各隊の越冬報告等にも記載されている．

私は，心理学や生理学についてはまったくの門外漢であるので，生活状況の細かい分析などについては記すつもりは毛頭ない．気象観測を担当する一隊員として，9次および13次の越冬隊に参加した経験をもとに，私の感じた昭和基地での生活を記したい．

南極観測隊は，現在40名で編成されている．その内10名は，夏の期間（現地では12月～2月）に生物観測や海洋観測，建設などにたずさわる隊員であり，残りの30名が越冬し，一年を基地で生活する隊員である．越冬隊員が担当している仕事は，観測部門と設営部門の2つに大別される．観測部門には，気象をはじめ極光，電離層，雪氷，医学等の13ないし15項目の観測および研究があり，13名がこれらにあたる．また設営部門は，基地生活の文明水準と生活環境を保つために担当する仕事であり，食糧，装備，通信，機械，医療等をうけもつ16名によって構成される．残りの1名は無論隊長である．

昭和基地での生活は，二つの制約された環境によって特徴づけられる．その一つは，特殊な閉鎖された自然条件の中で生活しなければならないことであり，他の一つは，限られた少人数で社会を創るところである．

私達の住む陸は温暖で四季の変化に富んでいて美しい．数多くのいろいろな人といつなん時でも会うことができ，いろいろな方法で話し合うこともできる．テレビ，新聞，ラジオや週刊誌は各地各種の情報を過多と思えるほど流し続ける．旅行やスポーツ等々の娯楽にもこと欠かない．それらがきわめて自然であるような環境に私達は生活してきたわけである．

それが，きわめて短期間のうちにいわゆる別天地に生活するわけである．自然といえば白一色，長い夜と長い昼，その昼と夜を結ぶ緩慢で単調な季節変化，年間約100日におよぶ雪嵐の極寒の世界である．出発を前の私達の脳裡には，このような荒涼とした厳しい世界が去来する．その上，たった30人の修験者のような生活，けっして滑らかではない雪原，氷原を300 km も離れたお隣

* 気象庁高層課，第9次・第13次南極観測越冬隊員

(最寄りの観測所―ソ連のマラジョージナヤ基地)，家族や知人と連絡をとるのも，カタ仮名でかいた意志の通いにくい数十字の電報といった孤独な生活を想像してしまうわけである．

越冬隊30名の構成は一口にいって寄せ集めの社会である．仕事が多方面の分野に分れていることはもとより，国内にいたときの各人の生活環境，出身，経歴，年齢も千差万別で，いわば一国一城の主達が，突然なにかの因縁で集まって「同じ釜の飯を食う」ようになったわけで，始めのうちはなかなか相手が解らないものである．私達が通常住んでいる世界では，特に接触する何人かの人の気心をつかめば，生活していく上でさほど不自由はしない．しかし，30人の世界では，全ての人が互に理解し合っておく必要がある．それもできるだけ細かい点にまで，そうすることが，楽しく無事に生活する必要条件なのである．

越冬隊の生活のふり出しは，「日帰り隊」(私達は夏隊を時としてこのように呼ぶ．南極の一年が，昼と夜からなる一日とう考え方から) のサポートを得て，建設作業から始まる．重労働をしたことのないもの達が，1年間の生活に必要な建物の建設，物資の輸送や整理，観測器機の設置や整備調整といった作業にあけくれる．始めて昭和基地に来たものは，まずこの労働に驚ろかされる．昔は，この期間に費やされる労働は非常に大きかったと聞く．現在は先輩諸氏の築かれた財産は増え，費やされる時間は年毎に減ってきている．とはいえ，朝早くから夜遅くまで岩盤を割り，コンクリートをねったりすることは今でも変らない．時には激しい気象変化を懸念して，南の地を這う弱い太陽の中 (白夜の太陽は南側にある) 徹夜の労働を余儀なくされることもある．この期間，私達は食事と寝るためのみの飯場棟に陣取る．先次隊の観測はこの間でも続行されているので，なるべくその邪魔をしないことと，基地の生活施設は30人用にしか作られてないためである．私達はこの間に，労働に疲れながら互を知り合い，手さぐりで新しい生活と新しい生活環境に慣れるのである．

最近は，2月の初旬に越冬の引き継ぎが行なわれる．先次隊が創り上げた生活と観測成果は全て先次隊が手持ちで「ふじ」に積んで帰ってゆく．建設期間の騒音まで持って帰っていってしまったように基地は突然静かになる．新しい越冬隊員は始めて個室が与えられる．一坪ほどの個室であるが，プライバシーが守れる唯一の場所である．この個室は，13次隊のとき (1972) に30人分30室が完成し，職場と居住区が完全に分離できるようになった．それまでは，基地のあちこちに建てられた観測棟の観測器機や通信機と寝起きしていたのである．最も，観測者や研究者にとっては，自分の取り扱っている機械の音は子守歌のようだというものもあったが，現在はそういう感慨も過去のものになった．

基地は，生活の中心となる食堂棟を囲んで，全て通路で結ばれた居住棟や娯楽棟・発電棟・通信棟などが立ち並ぶメイン街と，その他孤立した超高層の観測をする観測棟，気象棟，電離棟やロケット観測に必要な棟など，全部で16棟ほどの建物で形作られている．私達の生活の場所はこれら建物の建つ東オングル島の約1 km^2 なのである．

30名の人間が共に生活するとなると成文化されたある種の規則が必要になるという．規則が成分化されずすむ人数はせいぜい10人だともいう．30人は意外と大世帯なのである．

この規則は，基地での生活の安全を確保するために特に重点が置かれ，その他観測，研究がとどこうりなく行われるために決められているもので，細部にわたっては，各年次の隊によって異なっている．しかし，共通していえることは，基地での生活のローテーション，防災対策といった簡単なことである．そしてまた，隊の運営についての責任は無論隊長にあるのだが，各パートからの代表者によるオペレーション会議，そして議決する全員集会が持たれることになっている．

人間は適応力が強いという．確かに私達は越冬を開始して，とどこうりなく仕事をし，日々起る新しい自然現象に目をみはりながら完備した設備に守られて生活を築き始めてゆく．皆は国内での仕事の2～3倍程の仕事に忙殺され，始めのうちはそれこそ必死なのである．ある者はやがてくる冬のために，ある者は研究や観測の成果がすこしでも上がるように工夫をこらし，ある者は短い春の間の沿岸調査にと歩き回る．それは，日増に太陽が低くなるという自然条件からくる切迫感からでもあり，観測や研究の成果が目にみえて表われてこないあせりからでもある．太陽が低くなるに従って，基地を襲うブリザードも増し，また温度も下り始める．数日続くブリザードを窓からみやりながらジリジリした焦燥を感じるのもこの頃である．

本当の意味で，この自然に適応し，隊の生活に溶け込み，ゆとりをもって仕事ができるようになるのは，私の感じでは，基地で生活を始めて平均的に4～5カ月かか

針金で笹を模し，餅を食して七夕を祝う．（第13次越冬隊）

るようである．この時はすでに越冬の半分を過ぎようとしている．

このように，かぎられた自然，かぎられた人間生活は，むろん補給されないかぎられた物資による生活を余儀なくされる．新鮮な野菜や冷凍保存のきかないものは，1～2カ月でなくなり，日がたつにつれて乾燥野菜や肉類が主な食べ物となる．隊によっては，好きな者がささやかな野菜栽培を行なったり，春や夏には魚を釣ったりしてビタミンや蛋白質補給に一役かうが，いわばたかの知れた量である．このようにかぎられた材料で，毎日の食卓に変化をつけてくれる調理の人の努力は並たいていでない．それでも私達は，楽しみを食事に求める．そのために，いろいろと名をかりてはパーティーで変化をつける．「ロケット打上げ成功」とか，「最低気温経験記念」とか，あげくには，「彼女から電報がきた祝い」とか，これは，いわば生活を楽しくし，かつ楽しむ知恵である．国内にいればきわめて愚なる発想も，ここでは生活を楽しむ知恵になる．

現在は，かぎられた物資とはいえ，食糧や衣料は，ぜい沢をいわなければ十分確保されている．「宗谷」時代の輸送量50トンに較べれば「ふじ」の時代の500トンの輸送量は大きい．（越冬人員はこの間約2.5倍になっているが）しかし必要な物がなくなれば，それまでであることには今でも変りない．あとは何とか工夫するのである．ありあわせのもの，手細工のもので工夫するのである．

水一つについてみても同じようなことがいえる．顔を洗うのも風呂に入るのも水を使う．基地の回りは雪と氷で水には不自由しないよう思えるが，雪や氷から水を作るのには，燃料がいる．かぎられた燃料で，生活に不可欠な水を作らなければならない．現在では，顔を洗う水まで制限されることはないが，洗濯や入浴は，制限されることがある．ブリザードが続いて水が造れなかったときぐらいではあるが，南極ならではの話しである．

このようにしてミッドウインター（冬至）をすぎ，春を迎える頃には落ちつきゆとりをもって生活できるようになる．それとともに，内陸の調査に出かける旅行隊の編成やその準備，観測のしめくくりにまた忙がしくなるとともに，自然もまた短い春のおとずれをつげ始める．ペンギンや盗賊カモメがやってくるようになり，「ふじ」の東京出港を聞くようになると，長かった一年を整理しながら次の隊の受け入れ準備を始めるのである．

オーロラの美しかったこと，ダイヤモンドダストの輝き，繰りかえし見た映画のこと，麻雀や玉つきを憶えたこと，かじかむ手でコンパスを握ったこと，雄大な氷河に目をみはったこと，子供が生れたり，肉親を失ったり等々一年間のいろいろな苦楽と観測成果を先次隊がしたように再び「ふじ」に積み，新着の隊から流感をいただいて帰途に着くのである．